

# 学校新聞「お茶の水」の整理・収集・保存 — 創立 130 周年に寄せて —

新聞部顧問 石 出 みどり

## 1. はじめに

学校新聞「お茶の水」は1950（昭和25）年11月1日、「おちゃのみづ 高校新聞」として創刊された。1950年は朝鮮戦争が始まった年で、米軍占領下サンフランシスコ講和条約締結の前年である。米軍はさまざまな統制を行っていたが、本紙の発行はGHQが新聞用の紙を支給したことによって可能になったと聞く<sup>1</sup>。創刊号巻頭には野口明お茶の水女子大学学長、中沢伊與吉主事（校長）より祝辞と激励の言葉が寄せられている。

部室<sup>2</sup>に積み重ねられていく学校新聞の整理と保存は、長年の課題であった。2011年9月より整理を開始し、今年度創立130周年記念事業のひとつとして4つの方法で保存することができた。

## 2. 学校新聞「お茶の水」の整理と収集

部室の新聞を調べると、紙面の一部しか存在しない号も含め、発行号数の約75%が残されているとわかった<sup>3</sup>。まあまあの保存状況と言えるが、号数にして80号以上も欠け、1950（昭和25）年の創刊号から1976（昭和41）年の期間は半分のみ、1977（昭和42）年以降の号にも直近の20年間を除くと欠号があった。

中でも是非探し出したいと考えたのが、1968（昭和43）年に始まる制服改良期の新聞である。本校『紀要』<sup>4</sup>に新聞部が動いたと記されているにもかかわらず、それらの新聞は皆無であった。そこで2012年2月、石井副校長の許可を得て同窓会の作楽会にご協力を願った。作楽会メールマガジンに「附属高校からのお願い」として拙文が掲載されると、直ちに3名の方から連絡があり、これを手がかりに欠号を10号分ほど埋めることができた。

そればかりかこのやりとりの中で、1969年秋生徒会が機能停止状態になった時に「新聞委員会」も機能停止し、新たに「新聞部」が立ち上がったこと、「時風（じふう）」という手刷りの新聞が発行されたことを知らされた。その「時風」は一部部室に残されていたが、元部員の方から大切ないくつかの号を送っていただくことができた。

それでも欠落はまだ70号ほどあった。メールマガジンの登録者は作楽会会員の一部である。そこで欠号の多い1950（昭和25）年から1977（昭和52）年卒業の会員3096名宛てに、在校時の新聞探索と貸与の依頼を4月発行の「作楽会だより」に同封させていただいた。するとぼつりぼつりと古い卒業生の方々、そして遠くドイツからも新聞が届き、5月には制服改良期の新聞が、10月には遂に創刊号も届き、計51号分を集めることができた。いよいよ9割である。

協力者の最年長の方は昭和28年卒、70代後半の方である。折り目もびしりと、大切に保存されていたこれらの新聞には、学生時代と母校への想いがこもっている。一覧表の欠号を示す空白がひとつ、ふたつと埋められていく過程は、パズルを完成させるように心躍るものがあった。

たくさんの方にご協力いただいたが、次の方々からは直接資料を提供していただいた。作楽会、海老根（平野）静江、大谷紀子、金子（中井）糸子、絹谷（田村）弘子、木谷（古郡）悦子、古藤（田村）しのぶ、佐竹美知子、鈴木祐子、永岡美咲、成田（古谷）希世子、ホーヴィング（上江洲）幸子、松本（増田）早苗（敬称略）。

### 3. 学校新聞「お茶の水」の保存

2001年より2006年まで、お茶の水女子大学資料委員会は附属高校の学校史資料の悉皆調査を行なった。順次目録の作成や大学管理下への資料保存が行われ、2009年から2010年には卒業アルバムや校友会誌『お茶の水』等の電子資料化が進められた。また2012年の創立120周年記念展示会を機に、鷹野光行校長のもと『創立120周年記念展示会図録』も作成された。

着任以来、筆者は歴史ある本校の学校史資料が未整備のまま放置されていることを残念に思っていた。また学校史資料が良い歴史教材になりそうだという予感も得た。一般的な近現代史学習の教材のみならず、近代日本の女性の歩みを身近に感じ学ぶ教材になり得ると気づいたのである。2006年に開始したプロジェクト「校史資料」<sup>5</sup>によって活動は組織的なものとなり、いくつかの成果をあげることができた<sup>6</sup>。そこからは教科書には書かれていない歴史、自己への繋がりを実感できる歴史が現れた。またふとしたきっかけ、わずかな手がかりから教材を発掘、調査した研究過程そのものも、生徒の関心を引きつけた。

一方、学校新聞の保存への意欲は時間的制約にも押されてしだいに膨らみ、大学図書館に何度か足を運んで相談し、保存方法についての助言を受けた。

その結果、収集した新聞資料を以下の方法で保存することとした。

- (1) 現物の新聞資料を中性紙封筒と中性紙保存箱に保管する。
- (2) 創刊号から第281号（2012年9月21日付け）までの記事を見出しを中心に拾い出し、関係者の寄稿とあわせ『お茶の水女子大学附属高等学校創立130周年記念誌』（2012年11月発行）に「学校新聞『お茶の水』記事一覧」として掲載する。
- (3) 『学校新聞「お茶の水」1950年11月創刊号～2013年3月第284号』（2013年6月発行予定）として冊子化する。
- (4) (3)の資料を電子化する。

これらは創立130周年記念事業のひとつとして理解を得、教員会議で承認された。まず(2)は2012年11月23日の創立130周年記念式典にあわせ、1500部発行された。(3)は大判で大部のため、閲覧の便宜を考え5分冊とした。学校新聞のサイズは本格的なブランケット判<sup>7</sup>からタブロイド判より小さいもの<sup>8</sup>までであったが、ブランケット版は通常のタブロイド判サイズ

にそろえて縮小した。また紙面の明るさも印刷所に依頼して、文字や画像の読み取りやすさを第一目的に調整し、汚れも取り除いていただいた。作成部数は8部で、高校の資料室、図書室、新聞部部室に置くほか、大学図書館、作楽会、国会図書館に寄贈する。

#### 4. 学校史資料、教育研究資料としての学校新聞

学校新聞「お茶の水」は代々の生徒に受け継がれ、62年の歴史を刻んできた。紙面は自治会運営、学校行事、部活動、他校訪問、文芸作品、また武者小路実篤氏、三好達治氏、夏目鏡子氏（漱石夫人）、浜田広介氏、岡本太郎氏、村岡花子氏等往年の著名人から社会人、研究者、教員、卒業生、生徒へのインタビュー、さらに折々の社会問題、生徒へのアンケート調査、厳しい意見や風刺漫画、日常の学校生活の様子まで広く伝えている。1971年ごろまで掲載されていた近隣商店や出版社、映画館等の広告も興味深い<sup>9</sup>。創刊号の論説には、生徒の意見を公にする言論機関の誕生が誇らしく宣言されている<sup>10</sup>。校風のまま自主性に任された活動は、独特の紙面を形づくっている。

創刊当時2年生で創刊号編集責任者の樋口（柴田）恵子さんによれば、新聞クラブは他のクラブとは位置づけが異なり、各クラスより選出される1名のクラブ員プラス自由加入のクラブ員、計15、6名で成り立っていたという<sup>11</sup>。本校の生徒会（当時）は戦後の学制改革に伴い、1949年4月発足した。新聞創刊の1年半前である。新聞クラブはクラス選出でクラブ員を確保する半ば委員会のような組織だったのだろう。少し年代は下がるが『創立百周年記念誌』に示された「昭和31年生徒会機構およびクラブ」の組織図でも、「新聞クラブ」「図書クラブ」「会誌クラブ」の3つは「特殊クラブ」として束ねられ、「英語クラブ」、「箏曲クラブ」、「排球クラブ」等のクラブとは別扱いになっている。

新聞は通常4面構成で、創刊から第20号（1952年11月27日付け）までほぼ毎月のように発行された。生徒会の動きを報道しつつ、「御用機関ではない」ことを示して厳しい論調も見える。

その後1961年第80号の紙面には、望んで部員になったわけでもないのにこの仕事をやらされているという嘆きや、独裁的な紙面だとの批判に対する懸命の弁明が載り<sup>12</sup>、新聞発行活動の重責への不満が見られるようになった。「部員募集」の広告も恒常的に紙面に出されている。部員が足りない状況は、現在に至るまで部の常態と言えるようだ。

しかし制服改良問題が具体化した時、新聞部は大きな役割を果たした。1906（明治39）年以來の徽章のベルト、1930（昭和5）年以來の制服は、「お茶の水」紙上でも度々論議を呼んできたが<sup>13</sup>、この問題が具体的に表面化したのは1968（昭和43）年5月とされる<sup>14</sup>。「お茶の水」は同年から翌年にかけて第126号から第131号で継続してこの問題を取りあげ、生徒たちの意識を喚起しつつ、教官と生徒の意思疎通のための重要な場となった。

続けて翌1969（昭和44）年10月、執行部後期役員の立候補者がほとんど出ないという事態を迎えて生徒会活動が停止となり、1年生だった辻（谷嶋）千晶さんたちが「新聞委員会を乗っ取って」、新たに新聞部を立ち上げた<sup>15</sup>。本紙とは別に手書きのガリ切りをして発

行しつづけたわら半紙の号外「時風」<sup>16</sup>による呼びかけは、「(新たな自治会設立の) 準備委員会を大いに勇気づけた」と記録されている<sup>17</sup>。

また1975年9月の文化祭乱入事件では、刻々と事態の変化を伝える手書き校内刷りの号外Ⅳ、Ⅴ号と、直後に作成された「特別投稿特集」が残されていた。

さらに1994年10月には、「お茶の水女子大学附属高等学校共学化 平成9年度にも」という新聞報道が唐突になされた。その折新聞部内外の2年生が集まり、有志として手書き校内刷りの「のぞみ」を発行した。「のぞみ」は1992年に登場した最速の新幹線に因んだ命名でもあり、年4回の発行で速報性に欠ける本紙ではこの事態に対応できないとして活動したものである。これらのできごとについては、前出の『お茶の水女子大学附属高等学校創立130周年記念誌』に関係者の寄稿をいただいた。

紙面を「特集」に絞ってもう少し紹介すれば、自治会再建渦中の1970年6月の第134号から、「新高校生お茶の水」の連載が始まった。第1回の特集のテーマは「授業」で、「自主性を尊重 上野高校の授業改革」「どうする授業改革 お茶高の場合」の見出しがある。以後「クラブ」「余暇」「自治会」「マスコミ」「男女の差別」「先生」「女子校」「輝鏡祭」「読書」「早弁」「放課後」「百周年」「自殺」「友情」「ダイエット」「女性と職業」「大学入試」等をテーマに、1988年の「第45回アジア社会の中の日本」(第202号)まで続いた。以後の特集記事には「新高校生お茶の水」のタイトルはない。

1990年ごろからは生徒へのアンケート調査とその分析記事が頻繁に登場した。テーマは「お茶高生の職業観」「週休二日をどう使うか」「お茶高ファーストフード事情」「お茶高パソコン調査」「驚くべきケータイ、PHSの世界」「お茶高生の制服観」「お茶高生の携帯事情」「お茶高生とアルバイト」などである。こうした調査は集計作業が大変だが、生徒の本音がよく現れて興味深く、部員にも読者にも好まれるのだろう。

他にはこの60余年の間に「高校生と平和」、「女性の生き方」、「女性と職業」、「沖縄問題」、「大学・高校紛争」、「ベトナム戦争」「予備校を考える」から「終戦50年」、「エイズ問題」、「環境問題」、「食品の安全」、「新型インフルエンザ」等がテーマとなった。政治的な視点は薄れている。20世紀最後の年の2000年には、「連載・20世紀」として「宇宙への第1歩」「人々と宗教の歩み」「男女平等に目覚めた女性」をテーマに3回特集が組まれた(第243号～第245号)。

また学校史上の大きなできごと「国立大法人化へ!!」(第244号、2000年7月19日付け)、「祝本校創立120周年」(第251号、2002年12月20日付け)、「校舎改修 美しく生まれ変わる」(文化祭特別号<sup>18</sup>、2008年9月26日付け)、宇宙飛行士山崎(角野)直子さんの帰還(第271号、2010年5月28日付け)、「創立130周年記念」(第282号、2012年12月21日付け)として特集され、学校史を振り返る企画は度々登場している。

さらに第250号(2002年3月20日付け)では、「ベヒシュタイン お茶高のピアノ」の記事が載り、傷んだまま廊下に放置されている小型グランドピアノの名器ベヒシュタインの修理の必要を訴えた。そして幸運にもこの記事が契機となって、大学による復元保存が行

われた<sup>19</sup>。その事情は第257号「蘇ったピアノ 幻の音色再び」（2005年12月22日付け）で伝えられている。

発行は每学期末と文化祭時の年4回が近年の基本である<sup>20</sup>。学期末の試験勉強と原稿締め切り、校正が重なり、部員は毎回たいへんな思いをしている。原稿を早めに仕上げおけばよいのだが、諸事情から容易ではない。文化祭時発行の新聞は学外の来校者に配布することに配慮して、学校紹介的な特集を組んでいる。

生徒が自主的に作成するため、調査不足の記事や思い違い、誤記など不正確、不十分な記述も時に見られる。数年前からは生徒の気風の変化や校正時に修正の必要が多すぎることから、入稿前に顧問が目を通すようになり、誤記を出した場合には訂正記事を出すようにしている。また本校では生徒が作成した学校新聞が、学校説明会等での学校紹介資料のひとつとして配布されている。部員生徒に対し、新聞の作成、発行という活動が公的社会的な報道、記録であること、その公共性を明確に自覚させる指導が重要である。

さて、130周年記念祝賀会の席で「懐かしい。『茶実子』（のタイトル）も私が描いたままで…」という声を耳にした。どなたかが1959年の第70号で始めたコラム『茶実子の日記』が1962年の第90号からコラム『茶実子』となり、現在まで50年以上も続いている<sup>21</sup>。他方第215号（1991年）に登場した蘭子、菊子、梅子のおしゃべりコーナー『乙女の花園』は16年間も連載されたが、第258号（2006年）以来途絶えた。

卒業生の協力を求めた際、ご連絡いただいたのは元新聞部部員の方々が多かった。その折り前出の辻（谷嶋）千晶さんに、「当時は江戸川橋の滝澤印刷さんまで校正に通って…」と聞いて驚いた。2002年度までお世話になっていたからである。「江戸川橋は遠い」、「帰宅方向ではない」とのことから印刷所を替え、そこが廃業となり、2011年からは筆者が知る3つめの印刷所に依頼している。生徒自身が印刷所と直接交渉して作業を進め完成させる方式は、現在も同じである<sup>22</sup>。

他方、入稿から完成までの作成過程は大きく変わり、手書きの原稿用紙入稿、活版印刷<sup>23</sup>の時代から、今日は画像も含めUSBメモリーや電子メールを使った電子データ入稿、校正が可能となった。経費も格段に安くなり、自治会の部予算も大きく下がっている<sup>24</sup>。また本校のウェブサイトの「学校生活>クラブ活動>新聞部」のページに、活動紹介として学校紹介的な記事の一部公開も行われるようになった。

## 5. おわりに

1994年4月、退職された前顧問の古屋孝子教諭の後を受け、思いがけず新聞部顧問となった。引き継ぎ時に渡された新聞のバックナンバーの重みは、本校の歴史の重みであった。創立130周年記念を機にできる限りの資料を収集し、散逸を防ぐ手立てをとれたことに安堵している。長い時間と労力を要する仕事であったが、教務補佐の方にもお手伝いいただき、形をつけることができた。

本来であれば詳しく紙面を繰り、生徒から見た60年余の学校史について言及したいとこ

ろだが、今その余力はない。これらの資料が活かされる時のために、研究紀要の場をお借りして経緯を記した。他所に書いたものと一部重なる部分がある<sup>25</sup> ことをお断りしておく。

新聞の初期のものは紙質のせいも黄変もひどく、触れると崩れてしまうものもあった。時を逃さず収集と整理保存ができたことを幸運に思う。ここに至るまでご理解とご協力をいただいた多くの方々に、あらためて感謝申しあげる。創立130周年の祝賀に添える花束の一つとしたい。

- 
- 1 学校新聞「お茶の水」第215号（1991年12月21日付け）より。お茶の水女子大学新聞の創刊は同年6月1日である。
  - 2 2013年3月まで、3階3年蘭組の向かいの小部屋を大自然科学部（2011年より漫画研究部）と共同で、部室として使用していた。
  - 3 1964（昭和39）年3月2日発行の第100号には、「百号記念縮刷版発行！」の見出しで販売予約受付中の記事と「イヨイヨ縮刷版発行！ 一冊八百円」の広告がある。第104号（1964年10月3日付け）にも同じ広告があるが、「（前略）思うように資金が集まらず、発行予定の6月も延期されております。…どうか皆さまも一そうのご協力をお願い致します」との文面が添えられている。この縮刷版は発行されなかったのではないだろうか。
  - 4 加藤章・大和田順子「〈学校の記録〉制服改良とそれをめぐる生徒指導の諸問題」『紀要』第15号（1969年）
  - 5 『お茶の水女子大学附属高等学校創立130周年記念誌』（2012年）p.93参照
  - 6 石出みどり「3年必修「現代社会」憲法第24条と私たち」『研究紀要』第51号（2005年）、『歴史地理教育』（2007年4月号）、玉谷直子『実感』させる授業作りの試み ― 学校史資料を使った日本史の授業― 『研究紀要』第54号（2008年）、石出みどり「― 学校史資料を使った世界史の授業― ヒトラー・ユーゲントがお茶高にやって来た」『研究紀要』第54号（2008年）、『歴史地理教育』（2010年4月号）、石出みどり「― 学校史を学ぶ― 新入生対象「お茶の水女子大学附属高等学校の歴史」の授業」『研究紀要』第56号（2010年）。未発表のものとして、石出みどり「校歌『みがかずば』の謎」がある。
  - 7 第100号記念特集号（1964年3月2日付け、6面構成）。第101号（文化祭特集号、1964年6月23日、4面構成）、第104号（1964年10月3日付け、8面構成）。「本格的な紙面に取り組もうと、頑張りました」と当時の部員の方からお聞きした。第120号（1967年9月30日付け、4面構成）、第123号（1968年3月20日付け、同前）、第127号（1968年9月29日付け、6面構成）もこのサイズである。
  - 8 第252号（2003年9月27日付け）～第255号（2005年3月18日付け）。この時期は部員がひとりだった。別に手作りのワープロ版も1号分ある。（1998年10月3、4日付け）
  - 9 広告取りは負担の多い仕事で、広告の掲載を依頼して廻るのが辛いという生徒の嘆きも見られる。
  - 10 初代編集責任者樋口（当時は柴田）恵子さんによる。
  - 11 学校新聞「お茶の水」第80号（1961年4月10日付け）、第200号（1988年3月19日付け）の樋口恵子さんへのインタビューより
  - 12 学校新聞「お茶の水」第80号（1961年4月10日付け）の「エピソード」より。当時新聞部は委員制であったと思われる。
  - 13 4に同じ
  - 14 『お茶の水女子大学附属高等学校創立百周年記念誌』1982年、p.16
  - 15 辻千晶「新聞委員会から新聞部へ」「学校新聞『お茶の水』記事一覧」『お茶の水女子大学附属高等学校

- 創立130周年記念誌』2012年、pp. 177-178より。また第133号（1970年4月17日付け）に、2月1年生10人が集まり3月に臨時号を発行して新聞部として活動を始めた説明が載っている。なお1面の題字下に示される「発行所」の記載は、創刊号～第111号（1966年3月7日付け）は「新聞部」、第112号（1966年6月6日付け）～第131号（1969年7月19日付け）は「新聞委員会」、この第133号より現在までは「新聞部」である。
- 16 現存する「時風」は第12号（昭和46年10月19日付け）が最後である。
  - 17 『お茶の水女子大学附属高等学校創立百周年記念誌』1982年、pp. 89-90。野口和子「〈学校の記録〉自治会の成立をめぐる」（『紀要』16号、1970年）でも、新聞部による一般生徒への働きかけが指摘されている。
  - 18 「文化祭特別号」の名称のみで号数を持たない新聞が1982年と2006年～2009年の5号分ある。また前後する発行で、誤って同じ号数を冠している号もある。詳しくは「学校新聞『お茶の水』記事一覧『お茶の水女子大学附属高等学校創立130周年記念誌』（2012年）の注記参照。
  - 19 このグランドピアノはドイツのベヒシュタイン社製のもので、関東大震災後の1932年、本校が大塚に移転した際に附属高等女学校（現附属高校）生徒の保護者から寄贈されたものとされる。本校2階合併室前の廊下に置かれ、時折り生徒たちが弾いていた。音楽科では調律もされず、ポスターカラーが飛び散り、脚も壊れ傾いているピアノの修理を以前から訴えていたが、高校では費用の点からかなえられずにいた。2001年には存在を知ってもらおうと、東京MXテレビの取材も受けた。学校新聞のこの記事が当時在校生の保護者で大学資料委員会のメンバーであった秋山光文教授の目にとまり、大学が修理費用を負担し、以後保管することとなった。現在は大学図書館1階に置かれ、ミニコンサート等に使われている。
  - 20 創刊号から第50号まで6年、第51号から第100号まで7年4ヶ月、第101号から第150号まで11年7ヶ月、第151号から第200号まで13年6ヶ月、第201号から第250号まで14年1ヶ月と発行ペースが変化している。
  - 21 「茶実子」は「茶の実」に因んだ命名。「茶の実」はセーラー服の制服時代のベルトの帯の図柄であった。現在では本校の入学検定問題（理科）に登場する人名として受験生に有名。
  - 22 顧問交代時は支払いも会計係生徒が行っていたが、経費が大金であることから顧問が行うよう変更した。
  - 23 当時の印刷方法は活字と写真凸版、線画凸版を組み合わせた活版印刷で、1984年の第185号あたりまでこの方法で作成されていたと考えられる。凸版とは写真や題字、イラスト、図表等を専用のフィルムに撮影し、薄い鉛板に薬品で焼きつけ、画線部を凸にして凸部にインクをつけ紙に転写する方法である。使用した凸版の破片が一部部室に残されていた。（写真参照）
  - 24 2012年度の部予算は約30万円で、1号分4面450部の印刷費は7万円前後である。顧問を引継いだ20年ほど前の部予算は、60万円程度だったのではないだろうか。他の部と比べて高額の予算のため、また部員数が少ないこともあり、自治会予算請求の承認が難航したこともあった。
  - 25 「学校新聞『お茶の水』記事一覧『お茶の水女子大学附属高等学校創立130周年記念誌』（2012年）、「編集後記」『学校新聞「お茶の水」1950年11月創刊号～2013年3月第284号』（2013年）。



左から創刊号、第3号、第4号



部室に残されていた凸版  
第45号（1956年3月22日付け）